

# 单元「項羽－『史記』から－」学習指導法の 仮説検証的研究

常木 正則\*<sup>1</sup>・小黒 成寛\*<sup>2</sup>・中川 諭\*<sup>3</sup>

A Study of Teaching Material  
“「Kouu」－『Siki』－”

Masanori Tsuneki・Shigehiro Oguro・Satoshi Nakagawa

## 目 次

はじめに

- I 研究目標・内容・方法
- II 計画の作成
- III 分析の観点と方法
- IV 実施の概要
- V 分析考察
- VI 漢文単元実践研究の課題
- VII 協働実践研究の課題

おわりに

資料

(2005年2月21日受理)

- \* 1 新潟大学教育人間科学部国語科教育研究室
- \* 2 新潟大学大学院教育学研究科教科教育専攻国語教育専修（漢文学）1年
- \* 3 新潟大学教育人間科学部漢文学研究室

## はじめに

大学院教育学研究科の授業科目である「国語科教育方法演習」では、例年国語科学習指導法の仮説検証的研究を行っている。

授業の主目標は、履修生の国語科学習指導の実践的指導力の育成にある。合わせて、国語科学習指導法の知見を得ることを目標としている。研究過程の実施を履修生である院生にさせているのは前者の目標があるからである。後者の目標が主であれば、実施は実施学級の国語科担当教員が担うのが望ましいのである。

平成16年度は受講生が小黒成寛1人であり、専攻が漢文学であることから漢文の学習指導法研究に取り組むことにした。また、領域が漢文であることから、受講生の指導教員である漢文学の中川諭に、研究過程の一部に参加していただけるよう常木から依頼し実現した。

例年、この授業のまとめは、年度末に研究報告書として冊子を作成してきたのであるが、今年度は次のような事由から本研究誌に投稿し公開することにした。

- ・大学院の授業でも実践的な授業が求められているが、本授業「国語科教育方法演習」はその要請に応える内容をもっており、一つの先行事例となること。
- ・教科教育担当教員、教科専門担当教員、附属学校教員の協働による指導体制の構築が求められているが、今年度の「国語科教育方法演習」の授業では、協働による非常によい効果が認められ、一つの先行事例になること。
- ・中学校漢文単元のまとまった実践研究報告はほとんどなく、漢文単元のまとまった実践研究として、一つの先行事例になること。

## I 研究目標・内容・方法

### 1. 研究目標

よりよい漢文学習指導法を求める。

### 2. 研究内容

- (1) 先行実践・先行研究の研究
- (2) 中学校3か年を見通した漢文単元の学習指導計画の作成
- (3) 実施（第3学年のみ）による学習指導法の有効性の研究
- (4) 修正学習指導計画の作成

## 3. 研究方法

学習指導計画を実施し、学習活動の分析により、学習指導法の有効性を検証する。

## II 計画の作成

### 1. 先行実践研究

計画を立てるにあたって、いくつかの先行実践を研究した。主な参考文献は以下の通りである。

- ア 安居総子「漢文〈実践例2〉」『中学校国語科教育講座第二巻』有精堂、1972年
- イ 依田重忠「漢文「故事成語」」『中学校古典の授業—全国実践例—』右文書院、1978年
- ウ 新田大作・吉崎一衛「漢文—唐詩」『講座中学校国語科教育の理論と実践第五巻』有精堂、1981年
- エ 稲益俊男「史記—歴史の中の文学」『講座／現代の文学教育⑥』新光閣書店、1984年

この研究を通して得られた知見を、学習指導計画を作成の際に生かすこととした。しかし、実際ではほとんど生かすことができなかった。理由はこれらの先行研究が時代的に古く、今日の実践の目標・内容とかけ離れたものであったためである。

### 2. 中学校3か年を見通した学習指導計画の作成

実施する学級が使用している光村図書の教科書教材を元に、中学校3か年の学習指導計画を立てた。中学校3か年を見通した漢文単元の学習指導の内容及び方法の理解を得るためである。ちなみに、光村版では、1年生「名句名言、故事成語」、2年生「漢詩」、3年生「散文」となっている。

### 3. 第三学年の学習指導計画

ここでは、第三学年の学習指導計画を示す。配当時数は教科書会社の計画に従った。

#### (1) 作成の経緯

本学習指導案は、まず叩き台として作成したものに、佐藤佐敏先生、中川諭先生に指導を頂いたものを取り入れ、修正したものである。また、単元に入ってから、生徒の実態などに応じて、第2時、第3時の計画を修正した。ここに収載の学習指導案は修正を加えたものである。

#### (2) 学習指導案の実際

以下の通りである。

第三学年 国語科学習指導案

平成16年12月3日(金)修正  
国語教育専修1年 小黒 成寛

1. 単元名 古典を味わう(項羽 「史記」から )

2. 単元目標

- ・ 漢文特有の言い回しに注意して、漢文の読み方に慣れることができる。
- ・ 登場人物の状況や心情を読み味わうことができる。

3. 単元の評価規準

ア 国語への関心・意欲・態度	イ 読む能力	ウ 言語についての知識・理解・技能
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 漢文に興味を持ち、理解を深めようとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 書き下し文の意味を理解しながら繰り返し読んでいる。</li> <li>・ 登場人物の置かれている状況や心情を読み取ろうとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 漢文特有の言い回しを理解している。</li> </ul>

4. 学力と学習活動の実態

漢文については、1年次に入門として、名句名言、故事成語の学習を行い、いくつかの名句名言、故事成語を覚えた。2年次では3編の漢詩の学習を行い、そのうちの1編を覚えた。いずれも解説文があり、それを読むことで、名句名言、故事成語、漢詩の理解を得ている(以上は、仮想の実態把握である)。

本単元では、散文としての漢文と始めて出会うことになる。教材は、書き下し文、訓読文、現代語訳、解説文、作者、出典、学習の手引きで構成されている。話の内容は、現代語訳と解説文により、大体を理解するであろう。

5. 学習材について

本単元で取り上げる「項羽」の文章は、司馬遷『史記』「項羽本紀」からの抜粋であり、項羽の人生を大まかにカバーしている文章であるが、20万人を生き埋めにした残虐性や、部下と協力したり信頼したりすることのない自分勝手な一面を表した記述は省略されている。このため、『史記』に描かれた項羽の人間像を学ぶには必ずしも適していない文章である。

6. 学習指導の基本的な考え方

- (1) 漢文に親しみ、慣れることを第一とする。そのため、現代語訳で意味を理解させた上で、書き下し文と訳文とを繰り返し読ませる。
- (2) 作中人物の置かれた状況の推移は、十分に説明されていないので、指導者が補説をす

る。

(3) 作中人物の心情については、先の補説もよりどころとさせて、項羽の行為「泣数行下る」の理由を考えさせることで迫らせる。

(4) 項羽に関する物語は、司馬遼太郎の小説などからも広く知られ、親しまれているものである。生徒にはその壮大なスケールと人間模様的一端に触れさせることで、学習後にも進んで項羽と劉邦の物語に親しむよう導きたい。そのため、司馬遼太郎の『項羽と劉邦』を紹介し、教科書に載っている部分の一部を読んで聞かせる。

(4) については修正以前のものである。常木先生、中川先生のご指導などにより、『史記』中の別の場面を紹介した方がより効果的であると判断し、実際の実践では図書を紹介するに留めた。

## 7. 学習の進め方の概略

本文を読み、まず項羽の人となりや、状況の推移を理解する。

書き下し文を繰り返し読み、漢文独特の言い回しに慣れる。

書き下し文と訳文を比べ、言葉の対応関係を理解する。

漢軍が四方から楚の歌を歌った理由を考える。

最後に項羽が涙した理由を考える。

学習の確認をする。

『史記』中の別の場面に触れる。

## 8. 学習指導の展開(全3時間)

時	指導内容(国語の力)	時間	主な指導活動・留意点( )
1	1. 教材への心構えを作ること。	3分	1. 本単元の見通しを立てさせること。 今日から項羽という人物を題材とした、漢文の学習に入ります。まず、中国の王朝で漢という国を知っている人は手を挙げてください。項羽はその漢を建国した劉邦という人物のライバルで、劉邦は項羽との覇権争いに勝って漢を建国しました。今から約2200年前のことです。本単元で取り上げる文章はその項羽についての文章です。本単元では最後に学習を確認する意味で小テストを行います。
	2. 文章の意味をおおまかに掴むこと。	5分	2. 「項羽」を通して黙読させる。 ではまず、読めない語句に印を付けながら、全体を通して黙読してください。目安は5分です。では始めてください。
	3. 範読を聞き、正しい読みを確認すること。	7分	3. 範読を聞かせる。 では先生が読みます。皆さんは読めなかった語句などに注意しながら聞いてください。また書き下し文の所は

	<p>4. 書き下し文と訳文を関連付けて意味を捉えること。</p>	<p>7分</p>	<p>区切れなどにも注意してください。</p> <p>4. ペアで書き下し文と訳文を交互読みさせる。 では次にペアになって書き下し文と訳文を交互読みしてもらいます。まず、『史記』本文の引用部を一文ずつ交代しながら2度読んでください。その後交互読みをしてもらいますが、交互読みの仕方は、まず一人が書き下し文のマルまで読んだら、もう一人が訳文の対応する部分を読みます。 冒頭の1文を使って例を示す。役割を交代して2度繰り返す。</p>
	<p>5. 作者と出典及び書き下し文と訓読文の違いを理解すること。</p>	<p>8分</p>	<p>5. 作者と出典及び書き下し文と訓読文の違いを理解させる。 では64ページの作者と出典の所を見てください。そこに作者は司馬遷で、出典は『史記』とありますが、この文章の漢文で書かれたところはその『史記』の文章です。『史記』は人物ごとにその人を主人公とする伝記を書くことによって歴史を記した歴史書です。このような手法を紀伝体といいます。次に教科書の60ページを見てください。そこに上段と下段の二つに分けて書かれている文章がありますね。この上段の方は書き下し文と言い、下段の方は訓読文と言います。本来漢文には下段の方の文に付いている片仮名や平仮名、記号は付いていません。これを白文と言います。古来、日本に伝わったこれらの漢文を日本語として読めるように工夫していった結果このような訓読文の形ができました。書き下し文は訓読文の送り仮名や記号に従って文としたものです。</p>
	<p>6. 人物像を理解すること。</p>	<p>6分</p>	<p>6. 人物像を理解すること。 では内容に入る前に、項羽とそのライバル劉邦がどのような人物なのか、簡単なエピソードを紹介します。(「彼可取而代也。」と「嗟乎、大丈夫当如此也。」を板書する。)これは『史記』の文で、二人が秦の始皇帝を見たときの言葉です。感動しきっている劉邦に対して、項羽の自信や野心が伝わってきますね。</p>
	<p>7. 「四面楚歌」の意味を理解すること。</p>	<p>6分</p>	<p>7. 「四面楚歌」の意味を考えさせる。 では皆さんに考えてもらいたいことがあります。それは62ページの場面で、どうして漢軍は楚の歌を歌った</p>

			<p>のか、ということです。5分自分で考え、その後班で考えてください。プリントを用意しましたので、自分の考えと班の考えを分けて記入してください。</p>
	8. 班の考えを伝えること。	5分	<p>8. 各班の考えを発表させる。 では各班の代表者は発表してください。 授業者は板書しまとめる。必要に応じて補説する。</p>
	9. 本時を振り返り、次回の見通しを立てること。	3分	<p>9. 本時を振り返り、次回の見通しを立てさせる。 今日は「項羽」の文章について読みを中心に学習しました。次回は内容を中心に学習します。宿題は語句の意味調べです。これからプリントを配ります。また最後の時間には本文中の詩の部分の暗唱をしてもらいますので、練習してきてください。</p>
2	10. 前時を振り返り、本時の見通しを立てること。	3分	<p>10. 前時の学習を確認し、本時の学習の見通しを立てさせる。 前回は「項羽」の文章について、またどうして漢軍は楚の歌を歌ったのかということについて考えました。本時はその続きで、もう少し内容について触れたいと思います。</p>
	11. 読み合うこと。	5分	<p>11. 読みの確認をさせる。 ではまず通してもう一度音読しましょう。 ペアで交代読みさせる。</p>
	12. 音読すること。	7分	<p>12. 全文を通して一斉読みする。 次に全体で声を揃えて全文を音読しましょう。私に続いて読んでください。</p>
	13. 暗唱すること。	7分	<p>13. 暗唱の練習をさせる。 では前回の最後にも言いましたが次の時間に暗唱のテストをするので、詩の部分の暗唱を練習しましょう。声に出すと早く覚えられます。</p>
	14. 項羽の心情を理解すること。	16分	<p>14. 項羽の心情を考えさせる。 前回の時間にどうして漢軍は楚の歌を歌ったのかということについて考えました。今日は63ページの場合について考えてみたいと思います。そこに「項王泣数行下る」とありますが、どうして項羽は泣いたのでしょうか</p>

	<p>15. 班の考えを伝えること。</p>	<p>10分</p>	<p>か。まず 63 ページの書き下し文と訳文をペアで交互読みして、その後個人で考えてみてください。前回と同様にプリントを用意しましたので個人の考えと、班の考えを分けて記入してください。 班で考えてみてください。</p> <p>15. 班ごとに発表させる。 では班の代表者は発表してください。 発表内容を板書しまとめる。必要に応じて補説する。</p>
	<p>16. 本時を振り返り、次回を確認をすること。</p>	<p>2分</p>	<p>16. 本時を振り返り、次回を確認をさせる。 今日は項羽が最後にどうして涙したのかを中心に学習しました。次回はこれまでの2時間の学習をテストしますので復習をしておいてください。</p>
<p>3</p>	<p>17. 本時の学習を確認すること。</p>	<p>2分</p>	<p>17. 本時の学習を確認させる。 今日は前回の予告通りこれまで学習したことを確認する意味でテストをします。 プリントを回収する。</p>
	<p>18. 暗唱の練習をすること。</p>	<p>5分</p>	<p>18. 暗唱の練習をさせる。 ではテストに入る前に暗唱を練習する時間を取ります。5分を目処に練習してください。</p>
	<p>学習の確認をする。 ア) 暗唱のテストを行うことで学習に対する意欲、態度を確認すること。</p>	<p>6分</p>	<p>ア) ペアで暗唱の確認をさせる。 ではこれから以前にも言っておいた本文の詩の部分の暗唱をテストします。ペアになって相手と暗唱が出来ているか評価しあってもらいます。評価基準は滑らかに暗唱できていればマル、所々詰まる所があればサンカク、覚えていなかったり、部分的に間違っていればバツとしてください。評価する方は教科書を見ながら聞いてください。 挙手してもらいマル、サンカク、バツを聞き、メモする。自分ではなく相手の評価を聞く。</p>
	<p>イ) 涙した項羽の心情を書かせることで心情を理解できているか確認すること。</p>	<p>7分</p>	<p>イ) 項羽が涙した時の心情を書かせる。 では次に授業でも考えた、項羽はなぜ涙したのでしょうか。プリントを配りますので書いてください。理由は一つではなかった筈ですので、箇条書きで構いません。</p>

	<p>ウ) 本単元の項羽の物語についての感想を書かせることで、学習への興味・関心の程度を確認すること。</p>	7分	<p>ウ) 項羽の物語の感想を書かせる。 本単元は項羽という人物の物語を取り上げました。この物語について皆さんはどのような感想を持ったでしょうか。プリントに書いてみてください。</p>
	<p>19. 本教材への興味・関心を持たせること。</p>	15分	<p>19. 『史記』本文の一部を紹介する。 教科書に沿った学習はこれで終わりですが、学習の発展として、項羽が死を前にしてどのような気持ちになったか、それがわかる部分を紹介します。まず、プリントを配ります。(資料4参照)これは既に自分の敗北が決まった後に、部下に対して自分達が弱いから負けたのではないと語る場面です。 まず指導者が範読し、その後一斉読みとペアでの照応読みをさせる。 項羽のどのような気持ちが伝わってきますか。</p>
	<p>20. 本単元のまとめをすること。</p>	3分	<p>20. 本単元を振り返らせる。 これまで3時間、『史記』にある項羽という人物についての文章を見てきました。私は皆さんに項羽という人物について詳しくなってもらうのではなく、皆さんが漢文に親しみ、どのように書かれていて、どんなことが書かれているのかが分かるような授業をしようとしたのですがどうだったでしょうか。本単元の学習は一通り終わりましたが、皆さんにはこれからも是非この項羽の話や他の中国古典にも興味を持ってもらいたいのので、一つの本を紹介します。これは司馬遼太郎という作家がこの項羽と劉邦の物語を書いた小説です。『項羽と劉邦』という本です。『史記』の訳ではありません。この他にも三国志など現在まで愛されている物語が沢山ありますので是非読んでみてください。これで終わります。皆さんありがとうございました。</p>



(3) 修正とその理由

第1時の「6. 人物像を理解すること。」については、佐藤先生の指導を受け、この活動に変更した。漢文を専攻しているからこそできる授業を、ということで、『史記』本文から抜き出して紹介した。第2時の「12. 全文を通して一斉読みする。」については中川先生の指導を受け、この活動を挿入した。第1時において一斉読みはしておらず、読みの活動が不十分であったためである。第3時の「19. 『史記』本文の一部を紹介する。」については計画段階では司馬遼太郎の『項羽と劉邦』の読み聞かせであったが、学習のねらいを鑑みてこの活動の方が効果的であると判断し変更した。

III 分析の観点と方法

(1) 漢文特有の言い回しに慣れさせるために採った主な学習指導は有効であったか。

〈主な学習指導〉

- ア 繰り返し書き下し文を音読させること。
- イ 本文中の詩の部分の暗唱させること。

〈方法〉

- ア 音読の変化を観察すること。
- イ 暗唱のテストをすること。

(2) 登場人物の心情を深く理解させるために採った学習指導は有効であったか。

〈主な学習指導〉

- ア 「四面楚歌」の場面で漢軍が楚の歌を歌った理由を考えさせること。
- イ 項羽が涙した理由を考えさせること。

〈方法〉

- ア テスト形式で項羽が涙した理由をまとめること。

IV 実施の概要

1. 実施計画

(1) 実施目的

単元「古典を味わう 項羽―「史記」から―」の学習指導法の適切性を明らかにする。

(2) 実施日時

- 第1時 平成16年11月26日(金)1限  
9:10~10:00
- 第2時 平成16年11月30日(火)2限  
10:10~11:00
- 第3時 平成16年12月2日(木)2限  
9:45~10:30

(3) 実施教室及び担当教員

新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校3年2組  
佐藤 佐敏教諭

(4) 実施担当者

新潟大学大学院教育学研究科教科教育専攻国語教育  
専修1年 小黒 成寛(オグロ シゲヒロ)  
研究領域・研究対象:漢文学・『史記』

(5) 使用教科書・教材

光村図書平成14年度中学校『国語 3』「古典を  
味わう 項羽―「史記」から―」

(6) 実施参観者

大学院指導教員 常木 正則  
同 中川 諭  
実施学級担当教員 佐藤 佐敏

(7) 事前出校日

11月16日(火)1限 9:10~10:00  
・授業参観及び面識会(自己紹介)  
・担当教員からの単元計画の指導及び実施に当たっ  
ての打ち合わせ  
その他  
授業の様子をビデオに撮る。

2. 実施の実際 (分析考察を一部含む)

授業終了後、30分ほど、小黒、常木、中川で検討会を持った。考察にはその折に出た意見等を織り込んでいる。なお、文末に(O)とあるのは小黒の考察、(T)とあるのは常木の考察である。

第1時 平成16年11月26日(金) 9:10~10:00

〈全体的なことについて〉

○ 学習活動の展開のテンポがやや速いかなと思う程度で活動がだれなかった。

大方の学習者がまだ終わっていないのに、次の活動に移らせることは好ましくないことである。しかし、大方の学習者がすでに終わっているのに、少数のまだ終わらない学習者の終わるのを待って時間を延ばすことも好ましくない。課題に応じて大体の遂行の時間は決まっている。その決まった時間内に終わらせることを目標にして取り組ませることが大切である。学習指導の「2. 「項羽」を通して黙読させる。」では学習時間を5分とった。大方の学習者は本文を読み通したようである。まだ、読み通していない学習者もいたようである。この学習指導では、予告していた5分で活動を中断させてもよいのである。なぜかという、次の学習指導で、「範読を聞かせる。」が計画されていて、聞き読みによる通読ができるからである。5分以内の3分程度で読みきった学習者

もいたであろうけど、待っている時間は2分程度であるからそれほど大きな問題ではない。

しかし、全般的に見て、指導活動、学習活動が徹底しなかった。

○ 指導者の説明が明快であった。

これは主な指導活動について、生徒に実際に話す言葉を計画していたことと模擬授業等で練習していたことによるものであろう。生徒に話す言葉の明快さはとても大切なことである。明快さは話が生徒に伝わる条件であるからである。

○ 指導者の話の音量がやや貧弱であった。

もう少し張りのある声を出してほしい。

○ 板書がすばらしかった。

これも先の説明の言葉と同様、板書計画があり練習もしていたからである。本来1行で書くべき漢文を2行にしたのは、緊張やその他の要因によるもので、頭では分かっているが経験不足のため実際がともなわなかったことによるものであった。(T)

(主な学習指導に即して)

1. 本単元の見通しを立てさせること。

授業開始と同時に学習に取り組もうとする積極的な姿勢が見られた。緊張のためか本単元の最後にテストをするということを言い忘れてしまった。(O)

分かりやすい説明で、生徒には理解されたであろう。生徒はよく聞いていた。全体に話をするときの指導者の立っている位置に留意してほしい。この場合は中央であろう。生徒に向かった右側に位置していた。生徒は椅子に座ってその位置を動くことを許されていない。指導者のみが自由に動きまわるのは場合によるがこの場合は好ましくない。(T)

2. 「項羽」を通して黙読させる。

黙読は全体として真剣に取り組んでいた。数人は極端に早く終わっていた。5分を目途としていたが1、2分足りなかったように感じられる。(O)

一心に読んでいた。大方が5分以内に読み終わった。

(T)

3. 範読を聞かせる。

目途としていた7分でちょうど終わったが、中川先生の指導を受けて、漢文の箇所はもっとゆっくり読むべきであったように思う。また語句の読み方については、範読を中断して確認した箇所しかチェックしていない生徒がほとんどであった。(O)

やや読み方が速かった。また、授業後の検討会で、中川先生より「読み方が速かった。書き下し文と解説文を読む速さが同じであった。書き下し文はもっとゆっくり

と、ゆっくり過ぎるかなと思うほどにゆっくり読むとよかった」との指摘があった。確かにそのとおりである。理由は緊張のため速くなったようである。(T)

4. ペアで書き下し文と訳文を交互読みさせる。

何組かペアではなく個別に読んでいる生徒が見られたが、概ね指示通り交互読みをしていた。常木先生からの指導で、体の体勢を少し向かい合うようにしないと、相手に伝えようとする姿勢が生まれにくいと指摘されたので、今後のペア読みはそのようにしたい。(O)

大方のペアでは、お互いが読みを相手に聞かせるという自覚がなかった。お互いが正面黒板の方を向いたまま読んでいた。音読は一人で練習する場合もあるが、聞き手を設定して、聞き手に読んで聞かせるという場を設定するとよい。その場合は、また体勢にも留意してほしい。ペアで読み合うというのに、お互いが向き合うこともなく読んでいたのでは不自然である。

中川先生から「みんなで声を合わせて読む、読みがあるとよかった。昔、師匠さんが読んだ後を子どもたちが声を合わせて読むという学習形態があった。あのよう声を合わせて読む活動をさせるとよい」の指導があった。

(T)

5. 作者と出典及び書き下し文と訓読文の違いを理解させる。

書き下し文、訓読文、白文の違いとその変遷は概ね理解したようであったが、紀伝体の意味など、説明し切れなかったものもあった。この活動はもう少し工夫がいるように感じられた。(O)

学習者に理解されたかどうかはよく分からないが、説明そのものはよく準備された分かりやすいものであった。

(T)

6. 人物像を理解すること。

ここでは項羽と劉邦の秦の始皇帝を見たときの言葉を『史記』から引用して両者の性格を考えることと同時に、白文が訓読文となり、書き下し文となったその変遷も同時に理解させようとしたが、6分ではまったく足りなかった。生徒がノートに写す時間を少なく見積もっていたことが原因である。(O)

ここは参観者にとっても学習者にとってももっとも関心をひきつけたところである。模擬授業でも展開の仕方を検討したが、十分に印象深い学習にはならなかった。今後の学習指導のために、ここはどのように展開したらよいか一案を示す。模擬授業の折にも示したものである。

ア 板書は学習者全員に見えるように書く。学習者は現れてくる言葉を読む。

- イ 白文をどう読むか読むことを試みさせる。
- ウ 返り点等、読みがな、送りがなを付す。
- エ 書き下し文として読んでみせる。
- オ 大体の意味を伝える。
- カ 語句単位2回、1文単位で2回、後追い読みをさせる。
- キ 項羽、劉邦の性格を捉えさせる。(T)

7. 「四面楚歌」の意味を考えさせる。

生徒たちは概ね自分なりの考えを創出していたが、もう少し自学の時間を取るべきであった。班での意見交換は活発に行われていた。(O)

構造的を射た解があった。自分で1回、聞き読みで1回しか読んでいないのに話の内容をよく理解している。なお、この学習課題は5分の時間を予定していたが、時間に余裕がなくなって、2分であった。この学習課題は単元目標の一つ「登場人物の心情を深く理解させる」ために採った主な学習指導である。予定通りの時間をかけて追究させる必要があった。しかし、授業者によれば、予定した内容は時間を短縮してでも終わらせなければならないと思っていたようである。時間配分がうまくいかなかったということであるが、こういうことはよくあることである。原則は、学習課題の取組に必要な時間は保障すべきであろう。(T)

8. 各班の考えを発表させる。

すべての班に意見を述べてもらった。予想よりも多様な意見が発表されたが、「敵にエールを送る」といった意見に対してははっきりと否定できなかった。このような場合にどう対処するのかはこれからも考えていきたい。(O)

各班の代表が一通り発表したが、それぞれの発表を聞いてよりの確な理解を得させることはできなかった。各班から出た解答を明確にし、その正否を検討させ、よりの確な解答を得させる手続きが必要であった。しかし、この手続きが、時間の制約があつて十分になされなかった。中川先生から「各班から出てきた解答について、指導者はみんな正しいとまとめていたが、中には明らかに間違つた解答があった。「エールを送っている」は明らかに間違つた捉えで、そのことは、明確にすべきことであつた」との指摘を受けた。

この「8」の学習指導では、メリハリのある学習活動を展開させる必要がある。例えば、

- ア 班代表を前に出させて報告させる。または、班代表に解答を紙に書かせて黒板に貼らせる。
- イ 各班の解答の類似点、相違点を明確にする。

- ウ どれがよりの確な解答になるのか検討させる(T)

9. 本時を振り返り、次回の見通しを立てさせる。

時間が無くなってしまい、宿題のプリントを配るだけになってしまった。(O)

時間がなくあわただしい指示・説明であつた。(T)

第2時 平成16年11月30日(火) 9:10~10:00

(全体的なこと)

- 学習指導にメリハリが欲しい。

句や文単位の後追い読みにおける指導者の読み方や、班代表による発表時における発表のさせ方、聞き方等でもう少しメリハリのある指導をすると学習活動がしまるであろう。(T)

(主な学習指導に即して)

- 10. 前時の学習を確認し、本時の学習の見通しを立てさせる。

説明の仕方、時間配分など適切であつたように感じられる。(O)

話をよく聞いていた。(T)

- 11. 読みを確認させる。

音読の予定であつたが、ミスで黙読になってしまった。時間配分はもう少し長めに取りべきであった。(O)

音読の予定が黙読となった。単なるミスである。一心に読んでいた。5分のところ3分で中止させたので、最後まで読むことのできなかつた学習者がいた。(T)

- 12. 書き下し文を、文単位で2回後追い読み。

一文ずつ指導者の範読の後に生徒が追いかけて読む形式を取った。中川先生の指導を受けて、範読はもう少しメリハリをつけて、書き下し文の所はもう少しゆっくりと読むべきであつた。(O)

指導者の読みにメリハリがなく、学習者の読みに影響した。2回目は、「もう少し大きな声を出すように」との指示で、少し大きな声になった。合唱指導でもそうであるが、指導者の指導の在り方で、合唱や音読の様相は大きく変わる。指導力が歴然と現れる。(T)

- 13. 暗唱の練習をさせる。

全体として一心に練習していた。7分の予定であつたが、5分程度で覚えていたようである。(O)

暗唱の方法は学習者に委ねてもよいのであるが、ここでの指導もちょっとした工夫で活動に変化が出、かつ活動的な様相を見せるであろう。例えば、

- ア 自分なりの方法で暗記しなさい。時間は3分です。始め。

イ みんなで暗唱してみましよう。さんはい。もう一度繰り返します。1回確かめてください。いいですか。それでは、さんはい。(2分)

ウ ペアで暗唱しあいましよう。(2分)(T)

14. 項羽の心情を考えさせる。

11 と 13 で短縮した時間をここに補填した。そのため、十分な時間をとることができた。(O)

考える時間を十分に取っていた。個人の考えをまとめ、班でそれを紹介し合っていた。(T)

15. 班ごとに発表させる。

常木先生からの指導を受けて、発表時の生徒の体勢を全体に向けたものとするべきであったと感じている。また、発表内容は概ね予想されたものであったが、なかには首肯にくいものもあり、それらへの対応は第1時同様、研究するべきである。(O)

班の着席形態を取ったままで、自席で発表させていたので、発表は指導者に報告するという形になった。また、指導者は発表者の発表内容を要約して板書していたので、そのことがさらに指導者に報告することを促した。他の班の人たちは、発表を聞いている人もいたが、その聞き方は不自然である。発表者に正対して話を聞くことができない着席形態になっていた。また、指導者も共に耳を傾ける必要がある。発表内容を的確に要約しているのか疑問に思った要約があった。的確な要約は難しいと思った。理由が正当か疑問に思うものもあったが、皆よい、としたことに疑問が残った。(T)

16. 本時を振り返り、次回の確認をさせる。

説明の仕方、時間配分など適切であったように感じられる。(O)

第3時 平成16年12月2日(木) 9:45~10:30

〈全体的なことについて〉

○ 「天の我を亡ぼすにして、戦いの罪にあらざるなり」の前後の史記の訓読文・書き下し文、現代語訳、白文を発展学習として取り扱った。これに対して、生徒は興味を持って学習に取り組んでいた。それまでの学習での知識とかなり歯ごたえのある学習材であったことが興味関心を誘ったのであろう。こうした学習材は、漢文の素養と史記に関する知識がなければ用意できないものである。漢文学専攻、史記を研究対象にしている小黒さんだからこそ用意できたことである。また、漢文学の中川先生のご指導によるものである。授業者の専門分野、得意分野を生かした学習材の用意と学習指導を展開することができた。(T)

〈主な学習指導に即して〉

17. 本時の学習を確認させる。

説明の仕方、時間配分など適切であったように感じられる。(O)

18. 暗唱の練習をさせる。

前時からテストをする旨を宣告しておいたので、全体的に真面目に取り組んでいた。5分を目処としたが3分ほどで活動は停滞していた。前時にも暗唱の活動を取り入れていたためであると思われる。(O)

それほど難しい暗記ではないようであった。(T)

ア ペアで暗唱の確認をさせる。

ペアをしたことで、人間関係の面から活動が成り立たない組があるのではないかと心配したが、すべての組でしっかりと取り組んでいた。暗唱の評価は3段階に分けたが、評価方法や基準の面で工夫の余地があると中川先生から指摘を受けた。(O)

評価はすべてがマルとなった。テストは1回限りであった。3回ほどさせてそのうちの一番よかった暗唱を評価させてもよかった。実際は1回限りで、きちんとした暗唱がされなかった事例もあったようである。(T)

イ 項羽の涙した時の心情を書かせる。

ここではテストという言葉を使ったため、正解を書こうとする姿勢を強く引き出しすぎた結果となってしまった。また教科書をみてよいのかどうかについても同様で、私の考えでは自分の言葉で陳述して欲しかったので教科書は見せなかった。(O)

一心に書いていた。教科書を見ることを禁じたが、特にその必要はなかった。(T)

ウ 項羽の物語の感想を書かせる。

この活動も上段イ)と同様の結果となった。(O)

一心に書いていた。(T)

19. 『史記』本文の一部分を紹介する。(17分)

ここでは高校の教科書から引用した部分を使ったが、生徒は興味を持って取り組んでいたように思う。引用部に一箇所ミスがあった。この活動は生徒の興味を引き出す上で結果として外すことの出来ない活動となったように感じられる。(O)

ア 書き下し分の聞き読み

一心に聞き読みをしていた。

イ 後追い読み

声の出し方が不十分であった。

ウ 書き下し文と現代語訳の交互読み

熱心に取り組んではいたが、ただ声に出してみたというレベルである。

エ 解説

解説は明快であった。熱心に聞いていた。

オ 感想を聞く。

2人に指名して聞いた。

カ 指導者の感想を述べた。

やや明快さを欠いたが、耳を傾けてよく聞いていた。

(T)

20. 本単元を振り返らせる。

時間配分や説明は適切であったように思う。指導者が自分の体験や思いを語ったためか生徒は注意深く聞いていたように感じられた。(O)

## V 分析考察

分析考察の共通の観点2点及び分析考察者の問題意識に基づく固有の観点を1点設定し、各人が分析考察を行った。

### 1. 小黒成寛による分析考察

(1) 漢文に慣れさせるために採った主な学習指導は有効であったか。

漢文に慣れさせるために採った主な学習指導は「ア 繰り返し書き下し文を音読させること。」「イ 本文中の詩の部分の暗唱させること。」の二つである。

「ア 繰り返し書き下し文を音読させること。」については時間の許す限りふんだんに取り入れたつもりである。漢文教材は古典教材に属し、教科書の構成も、第1学年から第3学年まで日本の古典教材に続く形で構成されているが、元が古典中国語であり、書き下し文だけを取り出しても仮名遣いなどは共通しているが文章の構造が異なっている。このため、日本の古典には見られない独特の表現・言い回しが存在する。これらに慣れるためには読みの活動が最も効果的であると考え、音読の活動を取り入れた。音読はペアによる照応読み、指導者との後追い読み、一斉読みの3種類の音読を行った。これは生徒に飽きさせないため、音読と同時的に語句の読みの確認や区切りの確認をさせるためである。

学習を行ってみて、音読の様子から漢文に慣れさせるための「ア 繰り返し書き下し文を音読させること。」は有効であったように考える。単元の最初と最後では音読の様子が格段に違っていることがその理由である。また、単元の最後に教科書の引用部外の『史記』本文を紹介したが、そこでは一度教師の後追い読みをただけでかなりスムーズに音読できていた。「はじめて見る漢文の文章」という点で単元の開始時における教科書の本文と一緒に読むのレベルが上がっているということは音読を多用したことによる成果であると考え。

「イ 文中の詩の部分の暗唱させること。」については、漢文の独特のリズムや表現を覚えることによってそれらに慣れることを意図した。暗唱は漢文を読む際古くから最も一般的な方法である。暗唱する箇所は項羽の詠んだ詩の部分としたが、ここは文法の面、また語のリズムの面からも暗唱に適していると考えたためである。ただ、暗唱することがそのまま漢文に慣れることにつながるとは言い切れず、また実際に暗唱することによって漢文に慣れることができたのかを確認することが難しかった。

以上のことを見ていくと、漢文に慣れさせるために採った学習指導としての「ア 繰り返し書き下し文を音読させること。」「イ 本文中の詩の部分の暗唱させること。」の二つは一応の成果を挙げたと言うことができる。ただ、本単元の前後の学習の実態を把握することが出来なかったため、長期的な視野から有効であったかどうかは判断することが出来ない。

(2) 登場人物の心情を深く理解させるために採った学習指導は有効であったか。

登場人物の心情を深く理解させるために採った主な学習指導は、「ア「四面楚歌」の場面で漢軍が楚の歌を歌った理由を考えさせること。」「イ 項羽が涙した理由を考えさせること。」の二つである。

本単元で取り扱った項羽の文章は、『史記』を題材として項羽の一生をおおまかに描いた文章である。この教材そのものの適切性は次項で触れることとするが、この文章の中心は「四面楚歌」の場面などから構成される項羽の滅亡の場面である。原典である『史記』「項羽本紀」は項羽の一生を追って書かれているが、この教材はその抜粋であるために、単純に通読しただけでは項羽の一生をその行為から理解するのみに留まってしまう。そこで登場人物の心情を深く理解させることをねらいとし、その方法として上記の二つの学習指導を軸とした。項羽が涙した場面は、項羽という人物がどのような人物として『史記』に描かれているのかが最も表れている場面と言える。それまでの経緯や感情が表れているからである。「四面楚歌」の場面で漢軍が楚の歌を歌った理由を考えさせることは、この、「涙の理由」を考える上での材料として設定した。学習の最後に確認テストという形でどうして涙したのかを記述してもらったが、「死が怖い」「負けるのがくやしい」といった短絡的な解答は一つもなく、一定の成果は得られたと考えている。ただ、確認テストの問題と、授業中の発問が同じであったため、指導者がまとめた言葉をそのまま記述している例が見られた。この確認テストは飛び入りで授業をするために、学習指導の有効性を考える上での判断材料としたいと考え、

学習計画に取り入れたが、もう少し工夫が必要であったと考えている。学習の最後に項羽が部下に対して自分達の敗北は天の意志であると説く場面を『史記』から紹介したが、これを確認テストの前に設置すれば、項羽の青年期から死の場面までを通して生徒に印象付けられたのではないかと考えている。

### (3)教材そのものの適切性について

本教材は『史記』「項羽本紀」の抜粋に解説を加えたものである。『史記』からの引用は3ヶ所あり、訓読文と書き下し文に現代日本語訳が付いている。項羽の人生を大まかにカバーしている文章であるが、20万人を生き埋めにした残虐性や、部下と協力したり信頼したりすることのない自分勝手な一面を表した記述は省略されている。このため、『史記』に描かれた「自業自得」ともいえる項羽の人生を学ぶには適していない文章であり、項羽を単純に可愛そうな人物と捉えてしまう可能性がある。青年期に飛ぶ鳥を落とす勢いで天下の頂点に駆け上がったことなどについては、解説の部分で少し触れている程度であり、引用に多く出てきた虞美人や駿馬騅がその後どうなったのかについては触れていない。事実、生徒が書いた授業に関する感想にはこれら項羽以外の登場人物のその後について知りたかったというものが多々あった。この点で光村図書がこの文章を採用したことに疑問が残る。また、光村図書は一年次に名句名言・故事成語を載せ、二年次に漢詩を載せている。本教材は散文体の漢文の入門として位置付けられている。訓点などに従って、訓読文を正しく書き下せるようになることが目標なのではなく、漢文に慣れることが目標なのである。生徒に散文体の漢文に慣れさせるためには引用部を更に増やし、生徒が散文体の漢文を認識する材料をより多く提示すべきであると考え。わずか10行、字数にして100字程度の文章を提示して、漢文独特の言い回しはどれかと生徒に考えさせても、生徒からしてみればどの表現も独特に見えるであろう。より多くの文章を提示して、現在でも使っているような表現や、現在では使わないが既に学習した日本の古典に見える表現、漢文にしか見えない表現といった区別ができるようにすべきである。そうしてこそ漢文が現代の日本語にも息づいていることを生徒に理解させることができるのではないだろうか。

## 2. 常木正則による分析考察

(1) 漢文特有の言い回しに慣れさせるために採った主な学習指導は有効であったか。

① 繰り返し書き下し文を音読させること。

繰り返し声に出して読ませることで漢文特有の言い回しに慣れさせる、という方法は適当である。しかし、どのように音読させるかによりその効果は違ってくる。

指導者の音読がやや単調平板で、それが生徒の音読に影響した。

漢文特有の言い回しに慣れさせるための音読活動であるので、指導者がどう読んで聞かせるかということ、音読活動のステップを学習者の実態に合わせて計画し指導すること、この二つの準備が必要であった。

前者については、どのように読めばよいのか中川先生に教授いただくか、教科書会社が用意している音読・朗読のテープ・CDを求めて練習する必要がある。

後者については、次のような展開の仕方がある。

意味の単位として最も小さい単位の音読から始めて、徐々にその単位を広げてゆく。最後は文章となる。例えば、「項籍は、下相の人なり。字は羽。初め起ちし時、年二十四。」では、意味の単位として最も小さい単位で区切ると、「項籍は／下相の／人なり／字は／羽／初め／起ちし／時／年／二十四」となる。この単位で、指導者が、「項籍は」と読んだら、その後一斉に読ませる。そのとき声がよく出ていなかったら、「もう少し大きな声を出して」と指示して繰り返す。このとき、妥協は禁物である。十分声が出るまで繰り返すことが肝要である。こうして、意味の単位を徐々に広げ、最後は文章となる。

以上の音読活動のステップは迂遠のようではあるが、よい結果が得られるであろう。

② 本文中の詩の部分で暗唱させること。

これはとても効果があった。詩の意味を分からせ暗唱させ繰り返し復唱させることで漢文特有の言い回しに慣れさせることが出来た。ただし、暗唱の質、リズム、声量はあまりよくなかった。

単元の終末部で書かせた「項羽の物語についての感想」に「力は山を抜き 気は世を蓋ふ」の一節を引いて述べていた生徒が何人かいた。一例を引く。

自分の力を信じて戦っていたが、負けてしまった、(時は我に利あらず)の部分の項羽の気持ちが、何ともやりきれないと思った。漢軍が楚歌を歌っているとき、項羽はどんな思いだったのだろう。騅や虞も最後まで守りきれなかった自分に対し、情けないとも思っただろう。このやりきれない気持ちが表れている。「力は山を抜き 気は世を蓋

ふ・・・・」の詩が、とてもよいと思う。

暗唱させたことの効果表れた感想となっている。

大方の生徒にとって4行の詩の暗唱は簡単なようであった。暗唱能力のある生徒には、散文の部分の気に入った箇所の暗記に挑戦させても良かった。

(2) 登場人物の心情を深く理解させるために採った学習指導は有効であったか。

① 「四面楚歌」の場面で漢軍が楚の歌を歌った理由を考えさせること。

これと次の「項羽が涙した理由を考えさせること。」が、本単元の主要課題であった。課題を絞ったこと、しかも、この二つの課題に密接な関係を持たせたことがよかったことである。人物の行動、心情、思考について、叙述に即して確認をしていくやり方もある。しかし、この二つの課題のように、課題を精選して、その課題を追究させることで、状況の理解を確かめさせたり、作品の全体を見通した理解を求めさせたりする方が、学習活動に緊張感をもたらすようである。

さて、この課題の解答例であるが、「敵にエールを送るため」のような明らかに間違った解答があったが、後はみな適切な解答であった。わずか2回の通読で、的確な解答を導き出している、その理解力に意外な感じを最初は持った。しかし、漢文には現代語訳がついており、文章全体は附属中学3年生の理解力からすれば、難しい文章ではなかったのである。

② 項羽が涙した理由を考えさせること。

前者の状況把握の理解と文章全体の理解に基づいて、この課題に対しても的確な解答を出していた。「涙した」ことは、ある心情による行為である。行為の理由を考えさせることは、その行為の背景にある心情を追究させることになる。焦点を絞った心情の理解を得させるよい課題であった。

(3) 教科書の教材に関連した教材を導入したことについて

佐藤先生のアドバイスから、教科書にない漢文を第1時に導入した。それが、人物像の理解と漢文に対する興味関心の喚起に大きな効果が認められたことから、第3時にはさらに量的にも多い漢文を導入した。

まず、確認しておかなければならないことは、このような教材の導入を可能にしたのは、この方面の学識を持つ小黒と中川の両者が本実践に参画していたからである。そのような学識がなければ、教科書教材をどう学習させるかにとどまっていただろう。教科書教材だけでも、結構面白い文章ではあるが、二つの教材を導入したことで、より一層人物像の理解と漢文に対する興味関心を喚起したと思われる。

学習者の一人が、「項羽の物語についての感想」に「訓読文を書き下し文のように読むためにはどのような決まりがあるのかも知りたかった。」と書いている。これは第1時に、まず、白文「彼可取而代也。」と「嗟乎、大丈夫当如此也。」を示し、次に返り点等を付し、そして、読んで聞かせたことも影響しているものと思われる。

### 3. 中川 諭による分析考察

(1) 漢文特有の言い回しに慣れさせるために採った主な学習指導は有効であったか。

① 音読の練習

漢文学習の最初のステップは、やはり音読の練習に置くべきである。

音読の練習にもさまざまな方法があるが、中でも後追い読みは、漢文のみならず古典や外国語の学習においても、読みの練習の基本である。特に漢文においてこの学習方法は、昔から漢文を学ぶ人たちの間で行われていたものであり、「伝統的学習法」と言えるかも知れない。それだけ古くからその有効性が認められていたのである。この後追い読みを行うに当たり、授業者は読む時の抑揚の付け方、語句と語句の間の取り方などに留意する。学習者がそれに倣うことにより、自然と漢文の読み方を身につけていくのではないかと。そしてこの練習の繰り返しにより、漢文訓読調の読み方に早く慣れることができるであろう。そしてある程度漢文の読みに慣れたところで、クラス全員の斉読、教科書にある現代語訳との交互読みを行うという順序で読みの練習を行うのがよいだろう。

本実践においても、もちろん音読の練習の時間が設けられていた。しかし第1時においては、授業者の範読と学習者の2人ペアでの書き下し文と現代語訳の交互読みを行っただけであった。やはりクラス全体の斉読みの練習は必要であろう。特に一文ずつ教師の後について読む後追い読みの練習は、第1時だからこそ必ず行うべきではないだろうか。

また本実践では、訓読文を読むのではなく、書き下し文を用いて読む練習を行った。本来ならば訓読文で読む練習を行うのが理想ではあるが、実際には中学校の国語の時間では、返り点・送り仮名をはじめとした漢文訓読の方法にじっくり取り組む時間的余裕がない。訓読文を読む練習は本格的な漢文学習を行う高等学校に譲るとして、中学校ではその橋渡しの役割を担い、書き下し文を読むことであっても読みの練習を繰り返し、その口調に慣れ親しんでおくことの方が重要であろう。

② 詩の暗唱

一般的に文章を暗唱するのは、言語の学習にとってきわめて有効な方法である。漢文の学習において詩を暗唱することは、たとえ訓読したとしても、一定のリズムを持っており、暗唱しやすいものである。暗唱することで漢文の持つリズムを身をもって感じ取ることができるので、「漢文に慣れる」という学習目標を達成させるためにも有効な指導であろう。

しかし言語の学習である以上、意味内容との関連は重視しなければならない。にもかかわらず、表面的な言葉のみ暗唱し、今自分が暗唱している文章の意味を考えながら読んでいないのではないかと思われる学習者も数人見かけられた。暗唱するというものの意味をしっかりと指導していく必要があるのだろう。

(2) 登場人物の心情を深く理解させるために採った学習指導は有効であったか。

#### ① 内容理解

古典の文章である以上、文章を読んですぐその意味を理解するのは難しい。本教材では教科書に訓読文とともに書き下し文・現代語訳も同時に載っているため、それを有効に利用するべきであろう。

本実践では、2人ペアで書き下し文と現代語訳を交互読みすることで、漢文で書かれている箇所の内容を理解させようとした。教科書掲載の書き下し文・現代語訳を有効に利用した点はよい。しかし交互読みを行うにあたって、中には機械的に書き下し文と現代語訳を読んでいるだけのペアも見受けられた。書き下し文のこの一文が現代語訳のこの一文に相当するのだということを、学習者にもっと意識させる必要があるだろう。

比較的難しい語句については、補助プリントを準備し、意味調べをさせた。しかしせっかく語句の意味を調べても、その補助プリントへの対応があまりなく、内容理解へのつながりが薄かったため、十分生かされていなかった。また漢和辞典を利用するいい機会でもあったので、国語辞典ではなく漢和辞典を引くよう促してもよかったかもしれない。

#### ② 項羽の心情読解

「四面楚歌」の場面を取り上げて、そこから項羽の心情に迫り、読解を深めようとした。現代日本語の解説の部分ではなく、漢文の原文(訓読文)が掲げられているところから問題を出した点がよかった。また学習者一人一人が自分で考えた後に班で討論を行い、そしてクラス全体で発表を行ったことによって、自らの考えを深めることができたであろう。もし時間に余裕があり、第3時で補助教材として取り上げた「天の亡我、非戦之罪也」の場面も教科書の記述のような補助プリントを準備し、この

場面における項羽の心情の読解もできたならば、項羽の心情変化をより深く理解させることができたであろう。

項羽の心情読解の最初として、「四面楚歌」の場面から漢軍(劉邦軍)がなぜ楚の国の歌を歌ったのかを考えさせた。学習者からはおおむね正解とすべき解答が得られた。しかし中には「エールを送るため」などの的はずれな答えもあった。「歌を歌う」ということがどういう意味を持っているのか、中学生に対してそれをわかりやすく説明するのは難しいが、古典の世界では現代の我々の感覚とは必ずしも同じではないということを理解させる必要があるだろう。それも古典教材の大事な学習の一つだと思う。

次に項羽が歌った歌とその前後から項羽がなぜ涙を流したのかを考えさせた。こちらもおおむね正解とすべき解答が得られた。学習者には、項羽が歌った詩の内容やその後の項羽の最後の戦いの様子をも踏まえて、解答を導き出そうとする姿勢が見られた。

#### ③ 補助教材・発展学習

教科書では項羽が死を前にして最後の力を振り絞って戦う場面は、現代語で簡単に説明しているに過ぎない。その部分について、『史記』の原文(訓読文)を書き下し文・現代語訳とともに示す発展教材を準備した。このことにより、生徒の興味を引くことができたとともに、教科書に沿って学習した項羽という人物の人柄、そして最期を迎えようとしている項羽の心情をより深く理解することができた。教科書からの発展学習として十分な効果があっただろう。

#### (3) 教材について

今回の実践で用いられた教材は、司馬遷の『史記』「項羽本紀」からの一節であった。「項羽本紀」は「鴻門の会」の場面などが高等学校の教材として取り上げられることが多く、中学校の教材としてやや難しいかとも思われたが、適量分量の漢文(訓読文)と書き下し文・現代語訳が教科書に載せられ、また授業者が適切な解説を行うことで、中学校の教材としても使用することができると分かった。

本教材の優れているところとして、以下の点が上げられるだろう。

まず『史記』は歴史書であっても紀伝体で書かれており、ストーリー性を持つ物語のように読むことができる。このことによって学習者も書かれている内容に興味を持ちやすく、それだけ学習に取りかかりやすい教材であると言える。

また『史記』は古来日本人にも親しまれてきた文献であり、またその中でも「項羽本紀」はよく知られた文章



である。それだけに解説書も比較的多い。したがって、授業者の側からすれば教材研究を行うのに便利であるし、学習者としても発展学習に取り組みやすい。

そして『史記』は漢代に書かれた散文であり、正統的な文言文で綴られている。特殊な語彙・語法や読みづらい箇所もなく、漢文の初級教材としてふさわしい文章である。

一方欠点としても次のことが考えられる。

「項羽本紀」全体はかなりの長文である。中学生用の教材としては「項羽本紀」の文章全体を訓読文として掲げることができない。(高等学校の教材としても同様である。)現代日本語による解説があるにせよ、それだけでは「項羽本紀」の内容を十分理解するのは難しいだろう。たとえば教科書には、秦滅亡後、項羽がなぜ劉邦と争うようになったのかは明確に記されていないのである。また教材という性格上、項羽の残虐性に関する記述は省略されている。そのため本来「項羽本紀」に書かれている真の項羽像・項羽の人となりを正確に理解することは難しい。項羽を初めとする登場人物の心情読解を行う場合にも、教科書の記述のみでは十分な材料が与えられていない。それだけ授業者には学習者に対して十分な解説と、それにとまって、より深い教材研究が求められることになる。

以上のような性格を持つ教材であったが、本実践において授業者は本教材の優れている点と悪い点をよく理解した上で本単元の構成を考え、教材研究を行い、そして各時間の授業を組み立てていた。項羽の人となりが理解しづらい教材であったが、それを説明するために、秦の始皇帝を見た時の項羽と劉邦の感想を具体的に『史記』「項羽本紀」・「高祖本紀」から示した。具体的には、「項羽本紀」より、項羽が秦の始皇帝を見た時の言葉として、

彼可取而代也。(彼 取りて代はるべきなり。)

を、「高祖本紀」より、劉邦の言葉として、

嗟乎、大丈夫当如此也。(嗟乎、大丈夫 当に此のごとくなるべきなり。)

を挙げ、二人の秦の始皇帝に対する感想を比較させた。

このことで学習者は項羽の人柄を教科書に書かれてあること以上に理解することができた。優れた実践であろう。

## VI 漢文単元実践研究の課題

私は本授業実践を計画するにあたり、まず先行する研究を調べた。そこで、他の単元の実践研究に比べ、漢文

単元の研究が極端に少ないことが分かった。ほとんど研究されていないといっても過言ではない。これは学習指導要領において漢文単元で指導すべき範囲が明確に定められていないことや、高校入試に漢文は出題されないことなどに起因するであろうが、このため、その指導法などは十分に議論の余地が残されている。

漢文単元は教科書会社の提示している配当時間も短く3学年とも3時間程度であり、また内容も教科書によって異なっている。1年次は名句名言・故事成語で大体共通しているが、2年次では漢詩であったり散文であったりしている。3年次では漢文単元がない教科書もある。本実践研究で扱ったような散文体の漢文には全く触れない教科書もあるのである。これは漢文単元の学習が重視されていないことを意味している。しかし、漢文は千年以上前から日本人に読まれ、愛されてきたものであり、明治時代までは知識階級には必須の学問であった。このような背景から漢文は日本語として組み込まれており、私達の身のまわりには中国の故事に由来する言葉が驚くほど豊富にある。漢字本来の意味や熟語など、国語を正しく理解する上で漢文学習は必要である。本格的に漢文を学習するのは高等学校からであるが、漢字教育の延長という位置付けでも、中学校で漢文に触れる意味はあり、この点でこの単元は重視されて然るべきであると私は考える。

一般的に漢文単元の実践において困難な点は、指導者、生徒共に文章の読解であろう。専門的な勉強を積まなければ、白文はおろか訓読文すら正確に読み下すことができない。これは他に比べ教材研究に時間と労力がかかることを意味している。本実践において私は教科書の引用の他に『史記』の文章を紹介したが、これは『史記』が私の卒業論文、修士論文の題材であるからこそできたことで、四書五経といった経書をはじめとする他の書物が教材であったならばこのようにはいかなかったように思う。こうしたことから、漢文単元の実態は、ほぼ教科書をなぞるだけの指導が一般的なようである。しかし、

「IV 分析考察」で述べたように、教科書の内容は必ずしも生徒の正当な興味・関心と符合していない。入門として、漢文に慣れ親しみ、学習の後も進んで漢文に親しもうとする姿を生徒に期待するならば、相応の教材を提示しなければならない。この点でも、中学校における入門としての適切な漢文教材とはどのようなものなのか、研究し、提示すべきである。こうした研究がほとんどなされていない現在の状況では、漢文教育は衰退こそすれ進歩などないのである。

(小黒 成寛)

漢文単元実践の実践理論がなければならない。実践理論がなければこれを構築しなければならない。実践理論がなければ、実践計画は立たない。立ったとしてもそれは思い付き的な、あるいは例えば説明的な文章や文学的な文章の学習指導論を応用したようなものになる。

しかし、実践理論がないのであれば、思いつきのであろうとできる限りの時間と労力をかけて計画を立て実施し、それを分析考察することで、実践理論の構築を目指さなければならない。

今回、実践理論を求めて先行実践論文をいくつか検討したが実践理論を構築することが出来なかった。小黒が述べているように学習目標・内容が高度すぎて、わずか3時間ほどの配当時数しかない漢文単元の実践理論を求めることはできなかった。実践理論のないままに計画の作成に入らざるを得なかった。

小黒と常木とで立てた計画を見た佐藤から、「『史記』を研究の対象としているのであれば、その専門的な知識を生かした学習を組織したらどうか。」という指導があったのは、計画が説明文や文学の学習指導計画とあまり変わらないものであり、漢文の単元らしさがないことを見抜いたからであろう。確かにそのとおりであった。

しかし、佐藤のアドバイスと小黒、中川の持つ専門的な知識が導入されることで、実施に入る前に、そして実施に入ってから計画の検討を続けることで、漢文単元らしいものにすることができ実施することが出来た。

教育実践研究は、実践理論→計画→実施→評価→修正実践理論の過程を取る。どこからはじめるか。望ましいことは実践理論からである。しかし、実践理論が構築されていないからといって、構築するまで実施を待つことはできない。計画から始まって、実践理論の構築という過程を取ることもある。

漢文単元らしい計画を最終的には立てることができ実施することができたので、その実施を分析考察することで、計画を検討し次実践に向けての理論の構築が可能になった。望ましいことは、本実践の分析考察による実践理論に基づき、次年度の実践につなげることである。

(常木 正則)

#### ① 授業実践のあり方

漢文の読みには独特の調子がある。中学生の段階では当然それを理解してはいないであろう。漢文学習の第一歩として、漢文の読み方に慣れる必要がある。そのためにも読みの練習、特に後追い読みの練習を十分行う必要があるだろう。

授業中に授業者が漢文の訓読文を板書する場合、次の点に留意する必要がある。

まず白文を書き、次に読む順序に従って返り点をつけ、そして返り点に従って読みながら送りがなをつける。こうすることで、返り点の規則を復習しながらその一文を二度読むことになり、漢文を読む力も培われていくだろう。また授業者がこの順序で板書することにより、学習者もその順序をまねてノートを取るようになる。決して読む順序を無視し、上から単純に漢字・返り点・送りがなを書いていってはならない。

また学習者がノートを取るにあたって、白文はノートの二行または三行を使って大きく書くよう指導すべきである。返り点・送りがなは白文の横に小さく添えるものであり、白文を通常の一行の大ききで書いたならば、返り点・送りがなはさらに小さく書かなければならない。これでは学習効果が上がらないだろう。

漢文で扱われる文章は、中国の古典であると同時に日本の古典でもある。古代日本人は「漢文訓読」という方法を用いて、本来中国語で書かれていた文章を日本語として読み理解していた。そうして中国語で書かれた中国の古典が日本語に大きな影響を与えることになった。それを学習者に理解させた上で、現代日本語の中で日常的にごく普通に使っている二字熟語が、実は漢文の語法に則っていることに気づかせる。漢文を学習することで、日常的な言語生活が豊かになるような指導をしていきたい。

#### ② 漢文学習のあり方

中学校における漢文の教材としては、哲学的内容を持つ文章は学習者としても取りかかりづらく、あまりふさわしくないだろう。むしろストーリー性があり、内容に親しみを持ちやすく、しかもあまり長くないものがよいと思われる。たとえば、『戦国策』・『国語』の中の、故事成語と関わりのある文章などは、もともと当時の遊説家たちが自説を分かりやすく説くためのたとえ話が盛り込まれているため、現代の我々にとっても内容も比較的分かりやすい。寓話やたとえ話の部分だけであれば、分量もそれほど多くはない。また『史記』のような歴史文献でも、前後関係の説明をあまり必要でない部分を取り出すと、中学校の教材としてふさわしいものになるかも知れない。

中学校の漢文でも教材として韻文が取り上げられることがある。その場合はやはり唐代の近体詩がふさわしいであろう。しかし唐詩のいわゆる名作と呼ばれる作品の中には、往々にして平仄・押韻が規範にあっていないものがある。中学校では平仄・押韻を詳しい学習内容として取り上げないとしても、やはり規範にあった作品を教材とするべきであろう。

最後に、中学校における漢文学習はどうあるべきなのかについて述べてみたい。

元々は中国語であり、漢文の学習は中国の古典であった文章をとりあげるのであるが、やはり日本の古典としての学習としての取り組みが必要であり、学習者がそのことを理解できるよう授業を進めていかなければならない。そのために、漢字の学習や二字熟語・故事成語の学習と関連づけた漢文の授業を考えていく必要があるだろう。

国語科において漢文を本格的に学習するのは高等学校になってからである。しかし「漢文は苦手」という高校生は残念ながら多いのが現状である。したがって中学校では高等学校での漢文学習への橋渡しとしての役割を担い、漢文の文章に少しでも慣れることを目標に、漢文を学ぶことの楽しさ・おもしろさを教えること、それが中学校での漢文学習の理想ではないだろうか。

(中川 諭)

## Ⅶ 協働実践研究の課題

### 1. 協働の実際

教科専門の中川先生に参加いただいたのは、以下のとおり。計画段階では、単元の計画が一応できた段階で指導をいただいた。実施段階では、授業の実際を見ていただいて、授業後直ちに、本時の授業へのコメントと次時に向けての指導をいただいた。評価・改善段階では、単元の学習指導の分析考察を行っていただいた。

単元の計画案に対する中川の指導で、「漢文に親しませることが目標ならば、書き下し文をより多く読ませるべきである」との指導があり、書き下し文を読む活動を増やしている。

もう一点、「1年次に行った故事成語の学習にもよるが、司馬遼太郎『項羽と劉邦』の読み聞かせよりは、『史記』が元になった故事成語を調べるの方が効果的ではないか」との指導があった。これについては、次の事由により取り入れなかった。1年時の単元「古典と出会う(今に生きる言葉)」を作成した際に、学習活動「中国の古典に由来を持つ、名句、名言、故事成語の中から、一つ選び、意味や用法を調べ、発表資料を作る。」を組織し、生徒が今後出会うであろう故事成語を、『史記』『後漢書』『戦国策』等の古典から44個を用意した。こうした経緯もあって、1年生のときに学習しているであろうという理由で取り入れなかった。

しかし、生徒の一人が、「項羽の物語についての感想」で、「この話を読んで、四面楚歌の意味をようやく

理解できた。」と述べていたことから、繰り返しの再学習になったとしても、『史記』に由来をもつ故事成語の調べ学習を組織することも価値ある学習になるものと思われる。ちなみに、用意した44個の故事成語の内、『史記』に由来する故事成語は、「完璧」「四面楚歌」など全部で9個である。

実施段階での中川の指導の実際は、「2. 実施の概要」に織り込まれている。指導者の音読の仕方と学習者にさせている音読のさせ方に対する言及が多い。例えば、第1時の「3. 範読を聞かせる。」で「漢文の箇所はもっとゆっくり読むべきである」、第2時の「12. 全文を通して一斉読みする。」で「範読はもう少しメリハリをつけて、書き下し文のところはもう少しゆっくり読むとよい」などである。

第2時の終了後、第3時の発展学習の内容の検討が行われ、中川の指導で、「(今こうなったのは)天の我を亡ぼすにして、戦いの罪にあらざるなり」の箇所の前後の漢文も用意して紹介することになった。教材文は、中川が所有していた高等学校の教科書から取ったとのことであった。この発展学習は、小黒が「この活動は生徒の興味を引き出す上で結果として外すことの出来ない活動になったように感じられる。」と述べているように、画期的な教材の導入となった。この教材は、漢文に興味関心を持たせる上で、最初に計画した、司馬遼太郎『項羽と劉邦』の読み聞かせより、はるかに効果のあるものとなった。

附属学校教員の佐藤先生に参加いただいたのは、単元の計画ができた段階での計画の検討である。佐藤先生からは「『「史記」を研究の対象としているのであれば、その専門的な知識を生かした学習を組織したらどうか』という指導をいただいたとのことである。この指導を元に組織した活動が学習指導の「6. 人物像を理解すること。一では内容に入る前に、項羽とそのライバル劉邦がどのような人物なのか、簡単なエピソードを紹介します。(「彼可取而代也。」と「嗟乎、大丈夫当如此也。」を板書する。)これは『史記』の文で、二人が秦の始皇帝を見たときの言葉です。感動しきっている劉邦に対して、項羽の自信や野心が伝わってきますね。」である。

第3時に書かせた、「項羽の物語についての感想」に、ある生徒は次のように書いており、このときの学習、学習材が影響を与えていることが伺える。

項羽は劉邦に比べ、負けることが嫌いで強気な人物であった。しかし、秦討伐に加わった者の中でも楚軍と漢軍とに分裂してしまい、その後項羽の率いる楚軍は追いつめられてしまう。そのときに項羽は自分の無力さや時代が終わってしまうことを感じ涙

した。負けることなどが嫌いな人であってもこのように涙することはあるのだと思った。また、最後には自ら首をはねて死に、そのときにも項羽の負けず嫌い、強気な性格があらわれたのかなと思った。

「『史記』を研究の対象としているのであれば、その専門的な知識を生かした学習を組織したらどうか」という発想は私にはなかったことである。こうしたちょっとしたアドバイスが学習指導・学習の充実をもたらした。  
(常木 正則)

## 2. 協働の課題

研究計画を早めに立て、それを元に早めに協力依頼をすることである。研究計画を前年度に立て、できるだけ早くに協働者に示し、どのような参加を希望するのかを説明し、協働者からもどのような参加をしたいのか希望を聞くことである。お互いの希望を調整して計画を立てることである。

今回漢文学の教員に参加を要請したのは、新年度が始まってからである。しかも、参加の開始は、単元の一応の計画ができてからであった。今回は、古典—漢文という国語教育の中でも特異な分野であったので、教材研究の時点から参加していただくとよかったのである。ただし、その場合、週1回の授業に何回か出ていただくことになるので、負担を強いることになる。しかし、こうした問題は、何回か教材研究を一緒にやる計画をあらかじめ立てておけば、負担感は軽減するであろう。そうではなく、急に教材研究の会に出てほしいとか、実施として3時間附属で授業をするから出席していただきたいといったのでは、依頼された方にはすでに予定が入っていることもあり、迷惑なことであろう。今回、実施の観察に3時間も参加していただいたが、そのうちの1時間はすでに他の授業の予定が入っていたにも関わらず都合をつけて頂いた。大学の授業が行われている期間に実施するので、予定が重なることが出てくる。しかし、今回は、あらかじめ実施授業の観察に参加してほしいことを伝えてあったし、日程が重なったのは1時間分であったので、あまり無理なく都合をつけていただくことができた。

学級を提供していただいた佐藤先生には最初からきめ細かな指導をいただくことを予定していなかった。指導までいただくのはあまりに負担をおかけすることになる、という判断からであった。しかし、実施の授業は一緒に見ていただいたので、即時的なコメントでもよいからいただきたい旨をあらかじめ伝えておけば、やっていただけたであろう。これも研究計画の問題であり、何をやっていただきたいのかこちらの希望を述べ相手の都合と調

整すれば、即時的なコメントぐらいは確実にいただけただろう。

協働の課題は、冒頭に述べたように協働の計画を立て、協働者の了解を得て、実践することである。協働者も多くの仕事を抱えている中で、協働を受け入れていただくことになるのだということを忘れてはならないのである。  
(常木 正則)

今回の実践は、教科教育の常木教授が担当する大学院科目「国語科教育方法演習」の授業の一環として行われた研究実践であった。大学院の開講科目としては有意義な授業であることには違いない。しかし教科教育と教科専門の協働という点からすると、教科専門担当教員が参加しづらいという問題点がある。実際教科専門（漢文学）担当の中川が実践の計画に関わり始めたのは、附属中学校での実践が行われる日程の少し前からであり、計画立案の最初から関わったわけではなかった。

この問題を解決するためには、「国語科教育方法演習」のような科目を教科教育の教員のみが担当するのではなく、教科教育・教科専門の教員が連名で開講するのがよいのではないだろうか。こうすることにより、大学院生が研究授業の計画を立案するにあたり、教科教育の立場・教科専門の立場双方から指導助言を受けることができ、より充実した実践計画を立てることができるのではないと思う。

大学院の開講科目という点を離れて、教科教育と教科専門が協働した実践教育研究も今後必要になってくるだろう。今回の実践では大学院生が附属中学校に出かけてある1つのクラスの3時間だけ授業を行った。当然ながら現職教員に比べて経験や実践力は劣る上、普段から学級経営を行っているわけではない。もし日々授業実践を行い、学級経営もしている現職の専任教員が普段の自分のクラスで研究授業を行ったならば、生徒の反応もまた違ったものになったのかも知れない。

そこで、附属学校の（あるいは一般校の）教員が研究実践を行うこととし、その計画の段階から大学の教科教育の教員と教科専門の大学教員が関わって実践計画を立てていく。そして大学教員も実践を参観し、実践終了後に検討会を開いて、諸問題について議論する。このような形で教科教育・教科専門、さらに附属学校教員と協働して教育実践の諸問題を検討することで、より高度な実践教育研究を行うことができるのではないだろうか。

(中川 諭)

おわりに

院生の実践的指導力の養成、漢文（散文）単元の学習指導研究、教科教育担当教員と教科専門教員、附属学校教員との協働研究、と三つの課題を持った研究の取組であった。いずれについても、多くの知見を得ることが出来

た。  
熱心に取り組んでくれた小黒成寛さん、快く協働していただいた中川諭先生、佐藤佐敏先生に感謝申し上げます。  
(常木 正則)

#### 資料

- 資料1 各時の板書計画
- 資料2 第1・2時の学習プリントの学習記録例
- 資料3 第3時の学習確認テストの学習記録例
- 資料4 第3時に導入した教材

## 資料 1 各時の板書計画

### 板書計画

#### 第二時

項羽 — 「史記」 から —

- ・ 白文
- ・ 訓読文
- ・ 書き下し文

項羽 (楚)

「彼可<sup>キ</sup>取<sup>リ</sup>而<sup>シテ</sup>代<sup>ハ</sup>也<sup>ニ</sup>。」

秦 始皇帝

「嗟<sup>ハ</sup>乎<sup>ニ</sup>、大<sup>ニ</sup>丈<sup>夫</sup>夫<sup>ノ</sup>当<sup>レ</sup>如<sup>ク</sup>此<sup>ノ</sup>也<sup>ニ</sup>。」

劉邦 (漢)

○ どうして漢軍は楚の歌を歌ったのか？

- ・ (班の意見)
- ・ (班の意見)
- ・ (班の意見)

#### 第三時

○ どうして項羽は泣いたのか？

- ・ (班の意見)
- ・ (班の意見)
- ・ (班の意見)

#### 第四時

○ 項羽はなぜ涙したのか？

○ 物語の感想

資料2 第1・2時の学習プリントの学習記録例

学習プリント

名前

漢軍はどうして楚の歌を歌ったのだろうか。	
自分の考え	漢軍は楚の国に勝ったと「楚の歌」を歌うことで自分たちの余裕さを伝えるため。
班の考え	自分たちの余裕さを見せつけるため。
全体の考え	<ul style="list-style-type: none"><li>・味方がいないと思わせるため。</li><li>・心理的ダメージを与えるため。</li><li>・エールを送るため。</li><li>・楚を手に入れたことを知らせるため。</li></ul>

項羽はどうして涙したのか？ (注1)			
自分の考え	もう勝ち目が無いことが分かり、側近達や虞に申し訳ないと思い、泣いた。		
班の考え	<ul style="list-style-type: none"><li>・追いつめられて、力の無さに涙を流した。</li><li>・追われて、もう死んでしまうと思い泣いた。</li></ul>		
全体の考え	<table border="0"><tr><td><ul style="list-style-type: none"><li>・勝つ見込みが無いことを悟った。</li><li>・励まされた気持ちになった。</li><li>・戦力の衰えを感じた。</li><li>・自分の時代の終わりを感じた。</li></ul></td><td><ul style="list-style-type: none"><li>・国が減んでしまうと思った。</li><li>・別れが近いと感じた。</li><li>・絶望的になった。</li><li>・他にできることがない。</li></ul></td></tr></table>	<ul style="list-style-type: none"><li>・勝つ見込みが無いことを悟った。</li><li>・励まされた気持ちになった。</li><li>・戦力の衰えを感じた。</li><li>・自分の時代の終わりを感じた。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・国が減んでしまうと思った。</li><li>・別れが近いと感じた。</li><li>・絶望的になった。</li><li>・他にできることがない。</li></ul>
<ul style="list-style-type: none"><li>・勝つ見込みが無いことを悟った。</li><li>・励まされた気持ちになった。</li><li>・戦力の衰えを感じた。</li><li>・自分の時代の終わりを感じた。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・国が減んでしまうと思った。</li><li>・別れが近いと感じた。</li><li>・絶望的になった。</li><li>・他にできることがない。</li></ul>		

(これは生徒の学習記録を忠実に活字に直したものである。)

(注1) この欄は生徒に書かせたので、元は空欄である。)

資料3 第3時の学習確認テストの学習記録例

学習確認テスト

名前

項羽はなぜ涙したのか。  
力はみを集めしという項羽の言葉から、もともと漢軍に  
対抗できず力はあたというのに瞬く間に形勢を逆転されて  
しまった自分の情けなさを悲じたから。また垓下に  
立て込もうとしている虞や馬を守ることさほもできなくなり、  
自分の生存の経路が狭いということも悟ったから。

項羽の物語についての感想  
秦討伐に貢献した項羽が、自分の生存が狭  
いことがわづらうときには、悲しみを覚えるものだろう  
であつても、虞や馬や部下たちを思ふやうな優しさ  
もあって、とても偉れている人だと思つた。  
劉濞文を著者下し、又、句のように読むためには、さ  
な決まりがあるのかわからなかった。また、項羽の  
命が絶った後に、虞や馬はひりょうに陥つたため、  
女に死んだ。あと、項羽の叔父である、項梁のことにも  
もつとも知りたくなかった。劉邦のその後についても。



## 資料4 第3時に導入した教材

## 【 一 】

項王自度不得脱、謂其騎曰、吾起兵至今、八  
 歲矣。身七十余戰、所當者破、所擊者服、未嘗敗  
 北、遂霸有天下。然今卒困於此、此天之亡我、非  
 戰之罪也。今日固決死、願為諸君快戰、必三勝  
 之、為諸君潰圍、斬將、刈旗、令諸君知天亡我、非  
 戰之罪也。乃分其騎、以為四隊、四嚮。

## 【 一 】

項王自ら脱することを得ざるを度り、其の騎に謂いて曰はく、「吾兵を起こ  
 してより今に至るまで、八歳なり。身づから七十余戦し、當る所の者は破り、  
 撃つ所の者は服し、未だ嘗て敗北せず。遂に天下を覇有せり。然れども今卒に  
 此に困しむ。此れ天の我を亡ぼすにして、戦いの罪に非ざるなり。今日固より  
 死を決す。願はくは諸君の為に快戦し、必ず三たび之に勝たん。諸君の為に困  
 みを潰やし、將を斬り旗を刈り、諸君をして天の我を亡ぼすにして、戦いの罪  
 に非ざることを知らしめん。」と。乃ち其の騎を分かちて以て四隊と為し、四  
 方に嚮かわしむ。

## 【現代語訳】

項王はみずから脱出できないと判断して、自分に従っている騎士達に向かっ  
 て言った。「私が拳兵してから今に至るまで八年になる。この間、七十数回敵  
 と戦って、私に嚮かう者は破り、私が攻撃した者は降伏し、一度も敗北した  
 ことはなかった。そしてとうとう覇者として天下を自分の物にした。そうでは  
 あるが今ついにここで漢軍に追い詰められた。これは運命が私を滅亡させよう  
 としているのであつて、私が戦いに弱いからではない。今や、私は確かに死を  
 決意した。願わくは諸君のために思う存分漢軍と戦つて、必ず三度戦つて、三  
 度も勝とう。諸君のために漢軍の囲みをつぶし、敵の將を斬り、敵の旗をな  
 ぎ倒して、運命が私を滅亡させようとしているのであつて、私が戦いに弱いか  
 らではないことを諸君に知らせよう。」と。そうして自分に従っている騎士達  
 を四つの隊に分けて、四方に向かわせた。